発問例

・「導入の問い」のねらい

あなたの持ち物があなたのものであると、どのように証明できますか。

（ねらい）家族や親しい人でなく、他人に証明することを念頭に置く。証明の方法をいくつか出し、それを疑う人からの反論も考えてみる。自転車やペットの鑑札など、公的機関に登録されていれば証明できるが、自分の実感とは程遠い。しかしそれでも、それがなければ、究極的には証明できないケースもある。日常の確かさへの疑問から、現代生活の不安を描いた作品への導入とする。

●二二一ページ

問 **ブザーの音が「重苦しく」（1行目）と表現されていることから、どのようなことが考えられるか。**

答「彼」にとって快い音ではないこと。また、「彼」が積極的な人付き合いをしていないこと。

補今後の物語展開について不穏さをイメージさせる効果もある。「彼」の内面と物語全体との両面における意味合いを考えることが可能である。

問 **◉「ブザーの音をほとんど聞いたことがない。」（3行目）から、「彼」にとってブザーがどのようなものだと分かるか。**

答あまり使わない、必要のないもの。

補この後、「この間の電気屋だって…」（二二五・14）から、ブザーが電気屋に半ば強制的に取り付けられたということが語られていくが、不要なものであることで、「彼」の怒りや滑稽さは際立つことになる。

問 **「腹を立てながら」（9行目）玄関に出たのは、なぜか。**

答ブザーの音が不快であることに加えて、不要なブザーの取り付けを許した自分を思い出したから。

●二二二ページ

問 **「鳥打ち帽のひさしを上方に弾いた」（5行目）という顎鬚の態度から、どのようなことがわかるか。**

答「彼」に対しては礼を欠いても構わないというような、横柄さや「彼」を軽んじる様子。

問 **◉「えたいの知れぬ狼狽を感じ」（16行目）たのは、なぜか。**

答写真班が「彼」よりも家を重視しており、また、「彼」の家であるのに、その許可なしにものごとを進めようとしているから。

●二二三ページ

問 **「彼」が顎鬚の名刺に「急いで」「視線を走らせた」（5行目）のは、なぜか。**

答彼らが何者か早く理解したかったから。

●二二四ページ

問 **顎鬚が「いやに」はっきりと「大丈夫ですよ。」（5行目）と言ったのは、なぜか。**

答顎鬚は自分たちが家の写真を撮る明確な理由を持っているから。

補ただし、その理由は彼らにとってだけ合理的なのであって、一般的な了解は得られないものである。

●二二五ページ

問 **「あんたはまるまるあんただからだ。とこ ろがこの家はそうでない。」（2行目）とは、どういうことか。**

答「彼」の持ち主は「彼」自身だが、家の持ち主が誰かは分からないということ。

補直前で家の「持ち主」という言い方を顎鬚がしていることに注目する。

問 **◉「肩や背中から急に力が抜けていくような感じ」（11行目）は、事態に対する「彼」のどのような感じ方を表しているか。**

答 もはやどんな抵抗をしても無駄なのではないかという空虚感。

補 身体的な反応で実感的に表している。

問 **「目を吊り上げて、唇の端に泡を少し出して」（16 行目）いることから、電気屋のどのような様子が分かるか。**

答 単に怒っているだけでなく、怒りのあまり興奮している。

●二二六ページ

問 **「彼」が「うんざり」（8 行目）しているのは、なぜか。**

答 名乗らず用件も言わない相手に怒りをぶつけられる理不尽さに加え、軽蔑したような態度を取られ、自分の家を侮辱されたから。

●二二七ページ

問 **◉「現に僕がさっき何度、…思います？」（4 行目）には奇妙な理屈が含まれている。それはどのようなことか。**

答 「彼」は電気器具を求めていない。電気屋が自分の都合で訪問しているにもかかわらず、相手に行為の責任を負わせ、迷惑をかけられたと決めつけていること。あるいは、玄関からの呼び声が聞こえない事態は、電気屋が意図的に引き起こしたにもかかわらず、ブザーを設置しなければならない不便さがあらかじめ存在しているように言いくるめているから。

問 **◉「ブザーやベルの音は嫌い」（8 行目）なのは、「彼」がどのようなコミュニケーションを望んでいるからか。**

答 「ごめんください、という声を聞けば、…わけにはいかない」（二二七・10～二二七・11）、「友達のブザーも、…よっぽどいい」（二二七・12～二二七・15）から、どんな人でも均質なブザーの音に変換されるのではなく、その人の個別性を認識した上で関わりたいと思っている。

●二二八ページ

問 **「その自分の引き下がり方が、今のこの写真屋の場合とそっくりだ」（7 行目）とあるが、どのようなところが似ているのか。**

答 相手の理屈を封じるような反論ができず、言葉が出てこないままに家への侵入を許しているところ。

問 **「その不安定なもの」（12 行目）とは、どのようなことか。**

答 自分が家を所有しているという確信が持てないということ。

●二二九ページ

問 **「すべての因がそこにあるようであった。」（1 行目）とあるが、「彼」は何に気付いたのか。**

答 家を建てたときから抱いていた落ち着かない気持ちや、電気屋や写真班に何を言われても言い返せないことの原因が、購入金額の多くを借金が占め、自分のお金で支払ったのではない点にあったということ。

問 **◉「自分がこの家の付属物であるような」（2 行目）気がするのは、なぜか。**

答 「彼」は借金をして家を買っており、家のすべてを自分のものだと言えるか疑わしくなっているから。

補 敷衍すれば、借金を返すまでは働き続けなければならず、自分の意志で家やものを動かしているというよりは、家に自分の人生が従わされているようだから。

問 **「まずいけれども食べ残すわけにはいかないような気持ち」（6 行目）とは、どのようなものか。**

答 ソバだけが自分の持ち物であるような気持ち。

補 家を所有しているという自信を失った「彼」にとって、今や目の前にあるソバだけが所有できるもののように見え、それを食べ残

すということは所有物に対する自らの権利を放棄するような気持ちになっている。「ザルを持って立ち上が」るのもその表れと見ることができる。

問 **◎「僕をどけろと言うんですか。」（10 行目）と勘違いしたのは、どのような気持ちになっていたからか。**

答 「彼」は借金をして家を買っており、家のすべてを自分のものだと言えるか疑わしくなっているから。

補 自分は、家や家具のような「もの」に対して主人であるはずだが、棟木やガラス窓と等価値であるかに感じ、その存在の重要性に自信が持てなくなっていたから。

●二三〇ページ

問 **◎「光を発さない光源体みたいな感じ」（14 行目）とは、どのようなことか。**

答 あるものが、他でもないそれであることを示すもっとも重要な特徴や性質を欠いている状態。不条理でもあり、無意味でもあり、滑稽でもある。

補 この表現によって、自己存在の混乱は深遠なものとしてイメージされるが、その打破が、ソバという卑近なもので妨げられるところにユーモアがある。

問 **「そいつをぶち破る」（14 行目）とは、どのようなことか。**

答 写真班に反論することと、自分が置かれた状況を打開すること。

補 複数の意味が込められている。

語句の研究

●二二一ページ

1重苦しく鳴り響いた。　小説の冒頭には作品全体の方向性が示されていることが多い。ブザーの音を「重苦し」く聞いたのは「彼」であることを示すと同時に、読者に対してもブザーの音がこれからの物語の展開を予期させるものとなっている。

1茶の間　和風住宅において、食事と家族のだんらんに使われる畳敷きの部屋。「台所の隣にあるのだ。」（二二一・6）とあるが、これは通常の様式である。

キー・ポイント　モリソバ　ゆでて水にさらして締め、せいろや皿などに盛りつけた蕎麦。そばつゆにつけながら食べる。本文では一貫して「モリソバ」あるいは「ソバ」と表記されている。似非外来語のようなカタカナ表記によって、（盛り）蕎麦が一般的な語義を超えて特殊な意味を持った一つのモチーフとして成り立っている。なお、「彼」は蕎麦を「ザル」（二三〇・1）に盛っている。

2よたよたと　足の動きがしっかりしていないさま。

3日曜日には来訪者はめったになかった　ここから物語内時間が確定できる。本作品の冒頭部には時間・空間など舞台の設定が凝縮されている。

5玄関のブザーと書いた　「書いた」という叙述によって、物語の書き手の存在を想起させられるが、こうした箇所はここだけである。

8おマケ　「御負け」が語源。店員が客との駆け引きに負けて値を下げる行為を指していたが、のちに商品以外の物品を追加する行為も指すようになった。

9擦過し　かすめるように近くを通り過ぎること。

キー・ポイント　それにそれを許容した自分自身もだ。　理不尽に見える来訪者に対してだけでなく、自分にも怒りが向けられていることを、「彼」の人となりを見るうえで注意しておきたい。

●二二二ページ

1も一人　もう一人。「う」が省略されることで軽妙さが生み出されている。

2写真機　カメラ。現在主流となっているコンパクトデジタルカメラではなく、旧式のロールフィルムカメラ（二二四・図版）をイメージしたい。

キー・ポイント　鳥打ち帽のひさしを上方に弾いた。　人に挨拶をするときは帽子を脱ぐのが礼儀とされる向きがあるが、顎鬚は「彼」に対してそのようにしていない。この態度からは顎鬚の無礼さや不遜なさまよりも、「彼」の非人間的な扱われ方を見た方がよいだろう。

7いぶかしく　疑わしくの意。

7反問　何か尋ねられた時、こちらから逆に尋ね返すこと。問い返すこと。

14「近頃の建築はどこでも玄関が小さいのだよ。」　「彼」の家が比較的新しいことが、顎鬚の発話によって示されている。

●二二三ページ

2お心使い　「お心遣い」と表記すべきところではあろうが、原文ママとした。配慮の意。

4一斉に　そろって、同時に。

6押しとどめる　ある行動に出るようとするのを制止すること。

8余儀なく　やむをえずの意。そうせざるを得ないさまを示す。

11顧みた　振り返って後ろの方を見るの意。

14吟味するように　念入りに調べるように。

●二二四ページ

5 顎鬚がいやにはっきりした声を出した。　「いやに」には「妙に」（異常であるさま）と「ひどく」（程度が甚だしいさま）の意味があるが、ここは両義的である。

5 あなたを撮るのではなく、家を撮る　顎鬚はここで「彼」に「あなた」と呼びかけているが、直後には「あんた」（二二五・1）と変わっている。この間に顎鬚の「彼」に対する建前上の敬意すらも失われたことがわかる。

キー・ポイント　わたくしたちは命ぜられて、家を撮影する責任がある。　顎鬚が使う一人称複数形は、ここでの「わたくしたち」に加え、「わたしたち」（二二四・11）、「我々」（二二四・12）と多用である。「わたしたち」が最も一般的な表現だとして、「わたくしたち」はかしこまった物言いをするのに使われ、「我々」は「わたしたち」よりも改まった謙称ではあるが、顎鬚の発言では「彼」に対して居丈高であることを表す効果をもたらしている。

7 お給金　給料として支払われる金銭。給料、給与に同じ。

9 三脚　カメラや望遠鏡などをのせるための三本足の台。脚は伸縮・開閉でき、持ち運びに便利な形をしている。

12 融資　資金を必要とする人に貸借すること。

●二二五ページ

2 掌を打ち合わせた　両手の手のひらをぶつけ合わせたの意。当然ながら音も立ったと見てよい。質問を重ねる「彼」に対する顎鬚の威圧的な態度の一つである。

6 住宅金融公庫　住宅建設資金や土地、借地権を取得したりするための資金を融通する政府金融機関。第二次世界大戦後の住宅難から昭和二十五（一九五〇）年に設立された。顎鬚の名刺に記載された「金融公庫」（二二三・5）とは名称が異なる。

キー・ポイント　あまりにもピタリとした答え方だったので、彼は二の句が継げずたじろいだ。　「ピタリと」はきちんとした強い調子で物事をするさま。「たじろいだ」はひるむの意。この一文で、威圧的な顎鬚と、その勢いによって意気を削がれる「彼」との対比関係が簡潔に示されている。

12 いまいましい　腹立たしい。靴を脱がなければではなく「脱がさなきゃ」（二二五・12）と言う限り、この気持ちは「彼」自身に向けられている。

15 もう少し　既に少しの意。

●二二六ページ

3 奥の間　家の奥の方にある部屋。奥座敷。

4 コマギレ住宅　コマギレは細切れとも小間切れとも書き、いずれにしても「彼」の家の小ささや狭さの謂いである。屋内が細かく区切られた住宅。

5 控えの間　来客用の部屋、主の部屋といった主要な部屋に隣接し、家の使用人が待機場所として使用する小さい部屋。

キー・ポイント　ベルかブザー　ベルは、鐘や鈴、またはそれに似た音を出す装置のこと。ブザーは電磁石で振動版を振動させて音を出す装置。電気屋は最初「ベルを付けなさい」（二二六・7）と言っていたが、途中からブザーを取り付ける方向に転換している。これはベルでは「家が小さすぎる」（二二六・10）からである。ここでも「彼」の家の小ささが強調されている。

●二二七ページ

キー・ポイント　電気屋の残った足も上に上がってきた。　足自体が一つの生き物であるかのように擬人的に表現することで、電気屋の体の動きと発話を切り分けつつ、双

方が同時に進行していることを効果的に示している。このように、体のパーツを人物と切り離すような表現は、「ボタンを押し続けていたのは、顎鬚男の親指だった。」（二二二・3）、「イガクリはしきりに手足や機械を動かした。」（二二四・14）などにも見られる、この作品の特徴である。

3 三寸　およそ九センチメートル。

10 おおよその性格が見当つく　はっきりしていない来訪者の性格について、大体の予想ができる。

13 保険勧誘人　現在は「生命保険外交員」、「生命保険外務員」と呼ばれる。生命保険会社に所属し、家庭や会社などを回ってその会社の保険契約の締結を媒介する者のこと。

16 失笑　笑ってはならないような場面でおかしさに堪えきれず、吹き出して笑うこと。

●二二八ページ

キー・ポイント　トクをするのはあなただけじゃないですか。　来訪者の声がけという行為をめぐって、それを損得で捉える電気屋に対しては、表記においても違和が表明されている。それが「トク」というカタカナ表記である。来訪者の肉声を聞いて何者かを見定めたいという「彼」の欲望は、損得勘定を根底に据えていない。ゆえに電気屋の理解は「彼」の発言の要点を無視し、話を逸らす以上のものではない。こうしたずれは電気屋だけでなく写真班の二人にも見られる。

6 うやむやのうちに　事態がはっきりしないままに。この中には、来訪者の肉声かブザーかという議論の決着と、ブザーを取り付ける手続きとの両方が含まれる。

キー・ポイント　つまり俺がまごまごと押し戻されてしまうのは　「押し戻され」るとは、電気屋に肩を押されたという身体的、現実的な内容を指すと同時に、電気屋や写真班の発言の勢いに対抗することができずにいる状態をも指す。「つまり」という語には、電気屋に実際に肩を押された経験と、現在の自分の立場とを重ねて捉え、後者が持つ意味合いを「彼」が了解した瞬間が示されている。

12 その不安定なもの　家が自分の所有物であるという明確な了解を持てていないことを指す。

16 まつわり　つきまといの意。

16 物腰　態度。

●二二九ページ

1 因　物事の原因。

5 その二筋三筋を引き剝がして　「引き剝がす」ことからは、それだけの時間の経過があることが窺える。また、蕎麦が日常の象徴であるとすれば、「彼」をめぐる物事がスムーズに進まないことや、「彼」が思うように行動することの困難を示しているとも見える。

キー・ポイント　やはり少し声が高くなった。　この直前まで電気屋に関する回想場面が差し挟まれているため、物語内現在において直前の「彼」の発言は「これは住宅金融公庫の、外郭団体か何かですか？」（二二五・6）まで遡らねばならない。すると、「やはり」の語は前の発言との比較においてではなく、回想を経た「彼」自身の気付きの内容に関わるものとして読むべきである。家と自分との関係の不確かさに対する苛立ちと不安とが、「少し声が高く」なることと繋がっている。

12 なだめるように　怒りや不安などをやわらげ静めるように。

15 具合が悪い　体裁が悪い。都合が悪い。

16 肩をそびやかして　肩を高く上げ、威勢のよさそうな態度を見せて。直後に「すぐに肩を元の高さに戻した。」（二二九・16）とあり、虚勢に過ぎなかったことがすぐさま明かされている。

●二三〇ページ

1 次の間　主要な部屋に隣接する部屋。「彼」の家の場合、茶の間が主要な部屋に該当する。「部屋はもうこれだけしかない。」（二三〇・1）とあることから、茶の間をダイニングルームと捉えれば、いわゆる１ＤＫの間取りであることが窺える。また、電気屋に対して「彼」が言った「奥の間」（二二六・3）はこの部屋のことである。

3 不法なこと　道理や道義に背くこと。

キー・ポイント　**彼はそれを全部無理やりに口の中に押し込んだ。**　蕎麦は伸びて固まっており、それを「彼」自身が既に「ひどくまずい」（二二九・6）とも言っていたにもかかわらず全て頬張ったのは、「食べ残すわけにはいかないような気持ち」（二二九・6）があったからである。

11 しげしげと　物をじっと見つめるさま。つくづく。よくよく。

13 植木市　植木屋が栽培した植木や草花、盆栽、苗木などを持ち寄る露天市。十八世紀から盛んになり、主として寺社の縁日などに立つ。

14 光源体　それ自体で光を発する物体。発光体。

キー・ポイント　**何か叫び出そうとしたが、口いっぱいに詰め込んだソバのために、それはほとんど声にならなかった。**　写真班が自分の家の最奥にある庭の存在を認識し、あまつさえそれを品評するような物言いさえするに至り、「彼」と家との所有をめぐる繋がりは完全に切り離されたかに見える。さらに、「彼」の存在自体が無視されていることも相まって、事態はより深刻になっている。それゆえ、「彼」は状況に抗おうとするが、どのように抗うかという方略はこれといってなく（「彼」が叫ぼうとした内容は「何か」とあるとおり、不明のままである）、方略があったとしても遂行するための手立てを奪われている（「ほとんど声にならなかった」）。こうした状態に導いたものは、「彼」の思惟（が思うように巡らないこと）と蕎麦であり、写真班の二人だけが直接的な原因だとは見做しにくい。勤め人の男性が日曜日の昼に食べるものとして、蕎麦は決して珍しくはない、平凡なメニューである。「ソバ」が「彼」の声を奪うという事態は、これまで疑うこともなかった自らの日常が「彼」に立ちはだかり、生存条件が不確定であることの問い返しを迫ったと見ることもできる。

注意する語句

（＊で用例を示した）

赤ら顔…赤みを帯びた顔。日焼けや酒焼けなどで赤らんだ顔。また、血色のいい顔。
＊彼は扉を少し開け、その赤ら顔をのぞかせた。

たしなめる…よくない点について指摘する。
＊上司にやんわりとたしなめられた。

狼狽…慌てふためくこと。うろたえる。
＊思わぬ結果に狼狽する。

しゃにむに…なにごとも気にかけず、がむしゃらにやるさま。ひたすらに。むやみに。
＊しゃにむに働く。

後退り…恐怖や警戒から、前を向いたまま少しずつ後ろにさがること。あとずさりに同じ。
＊犬に吠えられ、思わず後退りした。

口を入れる…他人のことに干渉する。口をさしはさむ。
＊仕事の話に口を入れてほしくない。

念を押す…十分に注意して確かめる。重ねて注意する。
＊忘れ物をしないように念を押す。

二の句が継げない…呆れや驚きで次にいう言葉が出て来ない。
＊怒鳴られて二の句が継げなくなる。

目を吊り上げる…怒っているさま。目に角を立てる。
＊無神経な言葉に彼は目を吊り上げた。

いきり立つ…憤怒し、興奮するさま。
＊理不尽な要求に群衆がいきり立つ。

うんざりする…同じことが何度も繰り返されたり、同じ状態が続いたりして、あきあきするさま。
＊彼女のわがままな言動にうんざりする。

踵…かかと。あくつ。あくと。
＊踵を揃えて立つ。

身勝手…自分の都合や利益だけを考えて行動すること。自分勝手。
＊身勝手な言い分に腹が立った。

身をよじる…体をひねるようにくねらせる。
＊悲しみに身をよじって泣いた。

いまいましい…ひどく腹立たしい。癪に障る。
＊突然の雷雨に、彼はいまいましげに空を見つめた。

まごまご…どうしてよいかわからず、うろたえるさま。
＊入り口が見つからず、まごまごした。

しょぼしょぼ…力なく、あわれでわびしいさま。
＊悪いことが重なり、しょぼしょぼと帰路につく。

目障り…見て不愉快なこと。また、そのものや、そのさま。
＊駅前の看板は目障りだ。

目を白黒させる…苦しみで目をしきりに動かす。
＊餅をのどに詰まらせて、父は目を白黒させた。